
居候と不幸な少年

虹兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

居候と不幸な少年

【Nコード】

N 6 6 7 4 P

【作者名】

虹兎

【あらすじ】

ある日、俺は行き倒れに会った。しかもそいつらが魔術だなんだとか、異世界がどうだとか言ってくる。んなもん俺が知るかアア！

第1話 〈電波少女？行き倒れ？よくわからん〉（前書き）

どーも、虹兎です。

一日1〜2話程度の更新になると思います。

…頑張ります。

第1話 〱電波少女？行き倒れ？よくわからん〱

どーも、いきなりですいませんが、俺は夢でも見てるんだろうか？

だってそうだろ？目の前に人が落ちてきたんだから――

遡ること15分前。ある少年は走っている途中だった。

彼の名前は斎藤^{さいとう} 蓮^{れん}。15歳。黒のショートヘアで、他人の目を全く気にしてない髪型。身長は175近くで、普通にカッコいい。ただ、本人は無自覚。

そんな普通の高校生はスーパーの特売を逃すまいと全力で走っていた。

「今日は4月10日だろ？始業式だろ？なのになんで初めから個人面談なんだよ！恨むぞチクショオオオオオオオオオ！」

そんな感じで走り続けていたら、人が降ってきて冒頭の場面に戻る。

何だろうこの状況は。つーかこの人絶対に死んでるだろ…
と想っていたら、何やら言葉を発している。耳をすまして聞くと、

「ご飯食べさせて…」

「…いや無理です」

俺はそう返してこの場を立ち去ろうとした。だってそうだろう？
？特売に間に合わなかったら洒落にならん。

「ご飯食べさせて…」

「いやだからむ」「ご飯食べさせて」人の話を聞けエエエエエ
エエエエエ！！！」

俺はこのまま話してもしようがないと判断したため、全速力で
その場を去った。

数十分後。

「間に合わなかった…」

結局蓮は特売に間に合わず、来た道をトボトボ歩いていた。

「それもこれも全部あの行き倒れのせいじゃねーかアア！」

「うるせーよ！今何時だと思ってやがる！！」

「…すみません」

知らないおじさんに怒られた。

そしてあの行き倒れと会った道にさしかかった。どーせもういないだろ…と俺が思っていたら、端っこで何かがうごめいていた。

…うん？心なしか、行き倒れが二人になってる気がする…

「「」飯食べさせて」

「やっぱりそれかよ！テメーらはもっと違う言葉は喋れねーのかよ！」

「嗚呼、神よ。こんなにも可愛い少女にこの少年は食べ物のひとつもくれないらしいのです。一体こいつはどんな神経してるのでしょうか」

「めんどくせえエエエ！そしてムカつくなコイツ！」

もうめんどくさくなった俺は、行き倒れ二人を持って帰ることにした。

場所は変わって俺の家。俺は独り暮らしだから、必然的に家事をしなければならぬ。

仕方ないから俺はいつもより大分多く夕食を作って、行き倒れに食わせた。なんか涙ながらに食ってた。

その後俺は事情を聞くため俺の部屋に連れていった。

行き倒れ達の名前は、茶髪でポニーテール、眼の色も茶色の少女がアリス・キャロル、金髪のストレートで金眼の少女がローラ・ディアスと言うらしい。二人とも可愛い部類に入るだろう。

「で、アリスとローラはなんで落ちてきたんだ？」

「ちよつと魔術に失敗しちゃって」

「……………はい？」

落ち着け。あれだ。こいつらは電波少女だ。きつとそうだ。

「ねえ、聞いているの？」

「ああ、すまん。続けて」

「私たちは元々違う世界に住んでただけど、魔術のテストでミスって、先生に怒られて、反省しなさいって飛ばされたんだよ」

真面目な顔で話すアリス。

「そうか。お前らの言い分は良くわかった。だがもう俺の手には追えないようだ。警察に行きなさい」

「ちよつと！信じてないでしょ！」

ローラが怒る。いや普通信じられないだろ。

「じゃあその魔術をやってみてくれ」

俺はこの時、大きな間違いをしてしまったことに気付かなかった。

「わかったわ。じゃあ部屋の外に出て」

俺達は部屋の外に出た。すると、ローラが何やらブツブツと言いだ始めた。

「我、サラマンダーと契約し、炎を操る。前方に展開、部屋を爆破！」

ん？なんかおかしい言葉が聞こえたような…と考えた次の瞬間。

ドオオオオオオオン！

爆音と爆風が鳴り響いた。

そして目の前にあったはずの俺の部屋が消し飛んだ。

俺とアリスが啞然としてる中で、

「どう？これで信じた？」

とローラが何故かドヤ顔で言っていた。

「……テンメエエエエ
エエエエエエエ！！」

俺はローラに渾身の拳骨をくらわせて気絶させた。

第1話 〱電波少女？行き倒れ？よくわからん〱（後書き）

どーも、作者です。え？短いつて？ごめんなさい。これから長く
なってくると思うんで、どうか見捨てないで下さいね。

第2話　　く転入生く

どーも、蓮だ。今は結構ブルーな気分。何でって、そりゃ自分の部屋が荷物共々消し飛んだらショックだろ。

「で、これはどうしてくれんのかな？ローラさん？」

現在の状況を説明すると、焼け野原になった俺の部屋だった場所の中心にローラが正座している。その目の前に仁王立ちの俺。アリスは俺の後ろにいる。

「いいじゃない別に。あんたが見せろって言ったんじゃない」

「何故こんな強力なヤツを使うんだよ！もっと手軽なのねーのかよー！」

「あれよ。なんか派手な方がいいじゃない」

「よくねえよ！お前の魔法で直せねえのか？」

「無理よ。それから魔法じゃなくて魔じゅ「ボコッ」すいませんでした」

取りあえず軽くローラを殴った後で改めて回りを見回す。…ホントに酷い。戦後みたい。戦争経験はないけど。

「ところで魔術は信じてくれたの？」

というアリスの質問。

「…当たり前だろ。こんなもん見せられちゃあな。ところでお前らは帰らないのか？」

「それが、帰る為の魔術を私たちは知らないんだよ」

とアリスが言う。お前らは馬鹿か。あ、先生に飛ばされたんだっけ。

「ふーん。じゃあお前らはどうする訳？」

「そこで提案んだけど」「だが断る」私たちを泊めてほしいんだよ」

「俺の意思は無視ですか!？」

「「お願いします」」

アリスとローラが涙眼で見ってくる。正直キツいなこれは。

「……お前ら料理はできんの？」

「私は家庭料理程度ならできるんだよ」

「私は無理よ」

ちよつと待て。アリスはともかくローラは何なんですか？ただのお荷物じゃないですか？

「…ローラは一体何ができんの？」

「……………さあ?」

「よしわかった。アリスはウチで面倒を見てやる。ローラは出てけ」

「すいませんでしたごめんなさい何でもやりますから許して下さい」

「はあ…じゃあローラは毎日風呂掃除とゴミ捨てだな」

「えゝめんどく「嫌なら出てけ」喜んでやらせて頂きます」

…なんかこれからめんどくさくなりそうだな。

「あ、ちよつと待って」

「ん?なんだアリス」

「あなたの名前を覚えてもらってないよ」

「ああ、俺は斎藤 蓮だ。これからよろしくな」

「よろしくね、蓮」

「よろしく」

俺は二人と握手した後、リビングで寝た。

「…………ん、……………て」

ん？何か聞こえる…………気のせいか…

「…………れ…………、…………お…て」

なんだよ。もっと寝かせろよ……

「蓮、起きて！」

俺はアリスの声で目を覚ました。すっかり明るくなっていた。

「ああアリスか。おはよう…ところで今何時だ？」

「おはよう蓮。今は8時20分だよ」

…8時20分？確かうちの高校の登校時間は8時30分だったよな…………。つまり…

「遅刻かよオオ！」

昨日から制服は着ていたため格好はそのまま。教科書等を準備するため俺の部屋に向かう。

…そこには、焼け野原しかなかった。そうか…昨日の事件で俺の教科書とバッグは塵になったのか…

俺が途方にくれている間に、時計は8時30分を過ぎていた。

もういいや。手ぶらで行こう…

ところ変わって学校。俺が学校についたのは結局9時。しかも手ぶらで来た俺を見てクラスメート全員に笑われた。溜め息をつきながら俺は自分の席に向かった。

「よお蓮。2日目からやってくれるな」

こいつは俺の友達の浅川^{あさかわ}拓哉^{たくや}。幼稚園の時からおんなじ学校に通ってる。茶髪がかった黒髪で耳にかかるくらいの髪型。いわ

ゆる美形だな。こいつとは腐れ縁ってやつだ。まあそれだけじゃないけど。

「うるせーよ拓哉。俺の教科書とは1日で決別したよ」

因みに拓哉は俺の左隣。右隣と後ろはまだ誰もいない。

「そう言えば可愛い女の子が転校してくるらし」「黙れ」ギャア
アアアアア!!」

今俺が目潰しをしたのはただの変態だ。それ以上でもそれ以下でもない。

「初登場でそれはくない?」

仕方ないので一応、説明する。こいつは秋山^{あきやま} 温哉^{ほのや}。変態。
以上。

「もうちょっとこう……容姿とかさ……」

何かブツブツ言ってるが無視する。因みに温哉は俺の前の席。

「……………ちょっとそこ。授業中だからね一応。キャラ紹介大事
だけど授業中だからね……」

ああ、この人は担任。

「…いやそれだけ?」

「いや授業中ですけど?」

「私も紹介してよおおお!」

…この人は担任の鳴海^{なるみ} 由希^{ゆき}。26歳、独身。彼氏募集中。
生徒に自分の事を名前で呼ばせている。

「ああ、今日転校生来るからよろしく」

…いや今日ってまだ2日目だよね? 転校生来るの早すぎだよね?
?っーか温哉。ドヤ顔で俺を見てるな? ウゼエ。

「っーかあんたはあの自己紹介にツッコめよ!」

「いやホントのことだし」

「…もういいです」

「転校生は昼休みに来ます。じゃあ一時間目はおしまい!」

「…蓮、お疲れ」

拓哉に励まされた。

時は流れて昼休み。

担任の由希が入ってきた。

「はい、転校生の紹介をします。アリス・キャロルさんとローラ・ディースさんです」

「……お前らかよオオオオオオオオオオオオ！！！」

「皆さんこの二人となかよくしてあげてくださいねー」

恐らく二人の回りに大量の人だかりができると思った俺は、由希がいなくなるとすぐに二人を掴んで屋上に連れていった。

「…で、なんでお前らがここにいるんだ？」

「暇だったから（だよ）」

「…どうやって転入した？」

「魔術で先生の記憶を改ざんしたんだよ」

「いやそれダメじゃね？」

その時、屋上のドアから拓哉と温哉と女子二人が出てきた。

「蓮く何転校生を独り占めしてブベラッッ!？」

取りあえず温哉に裏拳をかます。温哉は痙攣してピクピクしている。

「ねえ蓮くんその子知り合い？」

今のは千藤せんどう 莉子りこ。俺の幼なじみで、茶髪が肩を越すくらいの髪型。

「そうですわ蓮。そのお方は知り合いですか？」

これは田島たじま 明日香あすか。こっちは中学ん時にある事情で知り合ったお嬢様。黒髪ロングの美人。

（おい、アリス。お前らの事喋っていいのか？）

（ダメだよ。ほんとに魔術は知られちゃいけないんだよ。蓮だけは特別だけど）

（わかった）

「こいつらは俺の幼なじみなんだ。仲良くしてやってくれ」
「」「よろしく」「」

「よろしくお願いします」

「ヨロシクね」

「俺とも仲よ」「お前は黙ってる」「ゲフッ」

まあこんな感じで学校は終わった。

第2話　　く転入生く（後書き）

作者（以下『作』）「これいつまで続くんだろっね」
蓮「お前次第だろ」

作「打ちきりになったらごめんね」
蓮「そのときはお前が何とかしろ」

第3話 〈パーティー〉

ちーす、蓮だ。取りあえず学校が終わったから家に帰ろうと思っただが、

「転校生歓迎パーティーしようぜ！」

とか温哉が言ってきた。

「どこで？」

「そりゃー、お前の家に決ま」だが断るウウウウ！」「ゴハア
！！」

いや無理に決まってるだろ。俺の家部屋が一個吹っ飛んだし。

「あ、それ良いかも」

「いや良いかもじゃなくて「じゃあ後で蓮の家に集合ってことで！」ふざけんなアアアア！それにうちには食べ物はないぞ！」

「あら、じゃあ私が用意して差し上げますわ」

「そういう問題じゃねえよ！」

…という流れで、何か皆家に来ることになった。

「パーティーの何がダメなの？楽しそうでいいじゃん」

「そうよ。何をそんなに怒ってんのよ」

アリスとローラが不思議そうに俺に聞く。

「どっかの金髪バカ女がぶっ飛ばした部屋を見られたらお前らの事がバレちまうからだろうが」

「うゝ……そんなこともあったようななかったような……」

「昨日の事だろうが！……まあいい。ローラは明日香の家に行つて食材をとってこい。アリスは俺と家で料理を作るぞ」

「了解だよ」

「え？私、明日香の家なんて知らないけど……」

「ああ、大丈夫だ。だってあれだから」

そう言つて俺が指差した先にあった建物は、めっちゃめっちゃデカい屋敷。

「……あれ？」

「あれ」

「行きは大丈夫でも帰つてこれないかも……」

「じゃあ明日香と一緒に来ればいい」

「わかったわ」

「それから、絶対にアイツらをあの部屋に入れないように」

「了解！」

そう言って俺はローラと別れた。

「じゃあ俺らもさっさと帰って料理しますか！」

「何だかんだ言ってやる気なんだね」

「まあな。楽しもうぜ！」

「そうだね！」

「「「お邪魔しまーす」「」」

拓哉と温哉、莉子が来たみたいだな。ちなみにローラと明日香はすでに来ている。

「いらつしゃい。料理はもう少しだからその辺でくつろいどけ。それと、絶対にこの部屋から出るな」

「えゝ何でだよ蓮の部屋に入れてくれよ」

「もう料理できたからさっさと始めるぞ」

「早っ」

俺とアリスは料理を並べていく。その数に他の奴らは啞然としている。

「「「「「……………」」」」」

「どうしたお前ら？」

「…いや、料理多すぎない？つーかお前一人で全部作ったの？と温哉が聞く。

「こんなもんだろ。それと、アリスにも手伝ってもらった」

実際、アリスがいなかったらこの半分も作れなかっただろう。
アリスはめちやくちゃ料理が上手だった。味見もしたが、その辺の
店よりは数倍も美味かった。

「まあとりあえず、乾杯しようか。じゃあ蓮の一言で」

「俺かよ！……コホン、えー、では転校してきたアリスとロー
ラを祝って…乾杯！！！」

『かんぱーい！！！！』

その後俺たちは大量の料理を食べたり、くだらない話などをし
て盛り上がった。

そしてその後、事件は起こった。

「蓮くんトイレどこ？」

「ああ、その廊下の左奥の扉だ」

俺らはこの時完全に油断していた。

「キャアアアアアアア！！！！」

トイレに行ったはずの莉子の悲鳴が聞こえる。俺らはすぐに莉子のところへ向かう。

「どうした!」

「蓮くん……泥棒に荒らされてるよ……」

そう言って莉子が指差したのは俺の部屋だった。

「……………しまったアアアアアアア!……!」

ヤバイ。バレた。油断したな……言い訳を考えないと……

「ひどいですわね……物がほとんどなくなってますわ」

言い訳を……

「というか蓮、これ本当に泥棒なのか? また何かやらかしたのか?」

言いわ「何か魔法で部屋をぶっ飛ばしたみたい」「ゴチャゴチャうるせえエエエエエエ!」「ヘグウ!?!」

こっちは必死で言い訳を考えてんだよ! オメーら少し黙ってる!

「……言い訳?」「……」

「……………あ」

ミスった。アリスとローラに助けを求めるため二人を見る。……ちよつと待て。おいローラなに笑い堪えてやがる。元はと言えばデメーのせいだろ。それと温哉はいつ復活したんだよ！

「説明……してくれるよね？」

「いやちよつと」してくれるよね？」「……はい」

拓哉の眼力に屈した。

「……という訳なんだよ」

俺の代わりにアリスが説明してくれた。最初は皆啞然としていたが、アリスが手のひらに炎をともし魔術を見せたおかげで信じたようだ。………つーか俺の時もそれでよかっただろ！

「スゲーなそれ！俺にも使えんのか？」

「無理だよ。こっちの人間は魔力を持ってないからね」

「へー、ところでローラって可愛いな」

「我、サラマンダーと契約し、炎を操る。温哉（変態）の顔に展開、焼きつくせ！」

「ギヤアアアア！熱い！死ぬウウウウー！」

「いっぺん死んどけ！変態！」

…今のは温哉が悪いな。他のヤツらは笑って見ている。つーかローラ、恐すぎだな。

「どうでもいいけど温哉の顔溶けるんじゃない？」

「大丈夫よ、最大限まで出力を下げたから」

「そういう問題じゃないと思うけど…」

そうこうしているうちに夜の11時近くになった。

「じゃあ、私たちは帰りますわ」

「おう、気をつけて帰れよ」

「『『『お邪魔しました』『』『』」

と皆が帰っていった。

すると拓哉が思い出したように戻ってきて、

「蓮、明日の仕事は市長の護衛だ。時間は9時から11時まで」

「珍しいな、二人なんて。そんなに大変なのか？」

「最近、市長を狙う奴らが増えてきてるらしくてね。明日の夜に攻めてくるって情報が流れてるみたいだね」

「りょーかい。じゃーな」

「ああ、おやすみ」

そう言って拓哉は帰っていった。

「仕事ってなーに？」

「ああ、アリス達にはまだ言ってなかったな。この町には4人、武術に秀でた人間がいて、それぞれ柔術、槍術、剣術、弓術を得意とするんだ。で、そいつらは仕事としてこの町の護衛とかをしなきゃならない。それをこなすと金がもらえる。普通は一人でどうにかなるんだが、今回みたいに二人なんて珍しいパターンだな」

「ということは、蓮もそのうちの一人ってことなの？」

「まあそうなるな。ちなみに俺は剣術、拓哉は柔術だな」

「でも全然強そうに見えないわね」

「余計なお世話だ！お前らもう遅いから寝ろ。二階の空いてる部屋を使え」

「ねえ」

「何だ？アリス」

「私たちも行つていい？」

「……………はい？」

「人数は多い方がいいでしょ？大丈夫だよ、足手まといにはならないから」

「いやそういう問題じゃなくて…」

「それに、蓮が戦つてるところ見てみたいし…」

「ん？何か言つたか？」

「な、何でもないよ」

「？…まあいいや、じゃあ魔術見られたらどうすんの？」

「記憶を消せばいいのよ」

「……………ローラさん今なんと？」

「だーかーらー、魔術を見た記憶を消せばいいのよ」

「そんなことできんなら拓哉達の人に言えよ!」

「だって面白そうだし」

「ふざけんなアアアア!」

「で、結局行つていいの?」

「…明日拓哉に聞いてみる」

突っ込み疲れた俺は二階に行き、新しい俺の部屋で意識を手放した。

第3話 〱パーティー〱（後書き）

作「第3話、どうだったでしょうか？」

蓮「俺の突っ込みの辛さが尋常じゃねーよ」

作「まあ主人公だし？」

蓮「関係ねーよ！」

作「あれですよ。今回は戦闘シーン突入ですからね、突っ込みも減ると思いますけど」

蓮「絶対減らないだろ…それと戦闘の方がめんどくせーよ！」

作「ゴチャゴチャうるせーよ！」

蓮「お前が振ってきたんだろうが！」

作「では、第4話で会いましょう！」

蓮「こいつマジでウゼエエエエ！」

第4話 〈市長邸防衛戦〉

うーす、蓮だ。今は俺の家で待機中だ。『仕事』までまだ時間がある。ちなみにアリスたちもついてくることになった。

「お前ら準備とかはいいのか？」

「大丈夫だよ」

「ところで、市長を狙って来るのってどんな奴らなのよ」

「うちの市長は色々と裏の連中に恨まれるようなことをしてきたからな。ヤクザとかにはよく狙われてる。今日来る奴らはそんなのばっかだろ」

「じゃあ余裕だね」

「ところでお前らの魔術ってどんな仕組みなんだ？」

「んーっとね……」

何故か話すのをためらうアリス。

「どうした？言いつらい事なのか？」

「蓮の頭じゃ理解できるわけがないから言ってもムダなことよ」

「どういう意味だよそれ！」

「そのまんまの意味よ」

「ウゼエエエエ！」

その時、携帯のアラームが鳴った。

「っと、もう時間か。二人とも行くぞ」

「蓮は何か持ってかなくていいの？」

「ああ、俺はコイツで十分だ」

そう言っただけで俺が手にとったのはただの木刀。

「アンタ、馬鹿じゃないの？ そんなただの木で戦うつもり？ 死にたいの？」

「お前、俺の事ナメてるだろ……いいんだよコレで。ヤクザ相手には十分すぎる。ほら、さっさと行くぞ」

「「はい」」

そう言っただけで俺らは家を出た。

「さあ、さっきの続きだ。魔術の仕組みについて話してくれ」

「魔術っていうのは、魔力の塊みたいなものの。この世界には六大精霊っていうのがいて、精霊と契約して魔力をわたすことで、それに見合った魔術を使えるんだよ」

「じゃあ一回契約しちまったらもうその精霊の力しか使えないってことか？」

「契約は一時的なものよ。だから、私たちはどの精霊とでも魔力が続く限り契約できる」

「基本は火、水、風、地の四大元素から成り立っていて、それぞれサラマンダー、ウンディーネ、シルフ、ノームと契約すれば使える魔術なの。その上位に光と闇があつて、ゼウスとカオスと契約すれば使えるらしいよ」

「らしいって何だよ」

「光の魔術が使えるのはホントに少しの人だけなの。闇なんか今では誰も見たことのない魔術だから、昔の事を調べるしかないの」

「ふーん…なんか、大変だなお前ら」

「蓮…アンタ結局理解できてないでしょ」

「失敬な！……っと、お喋りもそろそろやめねーとな」

「あんたが説明しろって言ったから説明したんじゃない！」

「お前はほとんどなにもしてねーだろ！主にアリスしか説明してくれてねーよ！…あ、アリス、ありがとな」

「え？あ、いいよ別に」

アリスが頬を少し紅く染めた気がしたが、特に気にしない。つかローラはうるせーな……

俺たちが話している間に、いつの間にか市長邸に着いた。

「あ、蓮。やっと来たね」

馬鹿デカイ門の前に立ってたのは拓哉だった。

「なんだよ、まだ9時になってないだろ」

「予定が変わった。仕事内容は市長邸の守護。邸内には侵入者を入れるな……だって」

………はい？

「いや、ちょっと待て。市長邸ってこの馬鹿デカイ屋敷のことか？」

「そつだよ。市長が外に出るのをやめちゃったからね。執事さんが土下座して謝ってきたよ」

「ふざけんじゃねーよ！この引きこもりチキン野郎がアアアア！！！」

「まあまあ。確かに二人だったら危なかったけど、きょうはアリスとローラがいるから大丈夫だよ」

「お前、二人だったらどうしてたんだよ……」

「さあ？」

「…まあいいや。とりあえず4人いるから、東西南北に一人ずつでいいな？」

「」「了解」「」

結局、俺が北、アリスが東、ローラが南、拓哉が西を守ることになり、それぞれ持ち場に散った。

side 拓哉

拓哉が他の三人と別れてから十分ほどで、ヤクザがた。

「…やっと来たね」

拓哉は即座に敵の数を確認する。ざっと二十人ほど。

「まあ…大丈夫かな」

ヤクザの一人が先陣をきつて来る。武器は…刀。構えから見て素人と分かるほど。

「……始めましょうか」

と拓哉は呟き、一瞬で間合いを詰め、鳩尾に膝打ち。ヤクザは呆気なく気絶する。

それを見た他のヤクザも次々と拓哉に襲いかかる。

（これは柔術を使うまでもないかな…）

拓哉は一人一人の動きを見極め、的確に急所を突き気絶させる。ヤクザを無力化してるうちに、他の場所でも爆音が聞こえ始めた。

他に氣をとられていたら、目の前に男の刃が迫っていた。

「チッ！」

拓哉は舌打ちをしながらそれを避ける。

「あなた、素人じゃありませんね…」

男は無言で拓哉に迫り刀を振る。しかし拓哉は見切り、避けて反撃をしようとするがその間に男は間合いをとる。

「面倒だな…分かりました。そっちが本気ならこっちも」

そう言つて拓哉は構えをとる。

再び男が迫る。

「月下柔術、『風旋』」

男が降り下ろそうとした刀を左上段蹴りで弾き飛ばす。そのままの勢いで左足を軸に右回し蹴りで相手のこめかみを射抜く。男は5メートルほど吹っ飛び、意識を失った。

「…………ふう…蓮たちは大丈夫かな…」

｝sideローラ

「…………人数多すぎよ!!」

ローラは自分の前にいる人の数に啞然としていた。今目の前にいるのはざっと50人。

「まあ、あんまり関係ないけどね…………我、シルフと契約し、風を操る。前方に展開、敵を切り裂け!」

ローラが唱え終わると同時にカマイタチが発生し、ヤクザを切り裂いていく。数秒後、ローラの元にいたヤクザたちは全滅していた。

「……弱すぎね」

｝sideアリス｝

「凄い音……ローラかな」

アリスは一人の青年と対峙していた。他の奴らは既に気絶している。

「よそ見をするな!!」

「キャッ!」

青年の剣を間一髪避けてアリスは体勢を建て直す。

「我、シルフと契約し風を操る。前方に「遅い!」クッ!?!」

アリスが詠唱を終える前に青年が迫り、切りつける。仕方なくアリスは魔術をやめて回避する。

アリスは苦戦していた。魔術は発動すれば協力だが、詠唱時間が長い。この青年はその間にアリスに攻撃を仕掛けていた。

「どうすれば……」

「隙ありー!!」

「!?!?しまっ……」

アリスが油断したわずかな隙で青年はアリスを斬りつけた。

「れ……………ん……………」

斬られたアリスは気を失った。

side蓮

俺はイライラしていた。え？なぜかって？だつてさあ……

「何で俺のところには誰一人として来ないんだよオオオオオオオ
！……」

そう、周りで戦いを行ってる音がしてるのに俺のところだけ何もない。

「ふざけんなアアアア！なんなんだよチクシヨオオオオオ！
！」

俺はここにいてもしょうがないと思ったから、他のところに参戦しようと思っていたら、拓哉が来た。

「あれ？蓮はもう終わったの？」

「ああ？俺のところに誰も来なかったじゃねーかよ！どうして
くれんだよ！」

「いや場所決めたの蓮だよ？」

「俺のバカヤロオオオオ！」

と拓哉としゃべっていると、ローラが走ってきた。

「ローラか…終わったの」「アリスがいないの!」…なに?」

「私が雑魚を倒してアリスの所に行ったときにはもういなくて…」

今にも泣きそうな顔でローラが言う。

「マズイね…人質にとられたかも知れないな。しかも中に侵入を許した……って蓮?どうした?」

「くくく……人がイライラしてる時にやってくれんじゃねえか…おいローラ!拓哉!行くぞ!」

「当然よ!」

「やれやれ…」

こうして俺たちは市長邸に入っていた。

「…………や、やめてくれ…」

「うるせえ！テメエは俺らを裏切りやがったんだ！死んで償え！」

「やめなさい！」「お前は黙ってる！」「キャア！」

ある一室で、市長と青年が対峙していた。

「あれは仕方なかったんだ…」

「何が仕方ないだ！テメエはこっちの人間だったんだぞ！それが何で市長になってやがるんだよ！なんで俺らを潰そうとしたんだよ！」

「もう理由がめちゃくちゃだよ！何でこんなシリアスな場面で私が突っ込まなきゃならないのさ！」

「うるせえ！」

私は青年に蹴られた。斬られた傷は治癒魔術で直したが、完全ではない。意識がもうろうとする。

「まずはお前から殺してやるよ…！」

青年の刃が振り上げられる。もうダメだ…

「おい、お前いい加減にしろよ」

その時、聞きなれた声が聞こえた。

「れ……ん……」

蓮の怒りは最高潮だった。目の前にはボロボロのアリス。しかもそのアリスに刀を振り下ろそうとしている男。キレる理由は十分だった。

「れ……ん……」

アリスが呟く。

「何だお前……」

「そいつから離れろ」

「はあ？お前何言って「そいつから離れろ！！」……チッ」

「……覚悟は出来てんだな？……来いよ」

男が蓮に迫り、斬りかかる。それを避け、頭に木刀を叩き込む……事は出来なかった。男はいつの間にか間合いをとっている。

「ねえ拓哉、蓮はアイツに勝てるわけ？」

ローラが拓哉に聞く。

「まあ見てなよ。あの状態の蓮に勝てるやつなんていないからさ」

拓哉は笑いながらそれに答える。

男が蓮に迫り、刀を振り下ろす。

「……月下剣術、協奏曲『罰』」

蓮が呟くと同時に男の手を木刀で打ち抜き、刀を飛ばす。ひるんだ男の懷に素早く潜り込み、木刀を振り抜く。男は派手に吹っ飛び、気を失った。

「……………まあ、こんなもんかな」

俺は男との戦いを終えた後、アリスのところに行った。

「大丈夫かアリ」蓮！！」ウォツ！」

突然アリスが泣きながら抱きついてきた。

「グスツ……………怖かったよ……………」

「……………よく頑張ったな」

「……………うん」

「……………帰るか」

「うん！」

「おい！貴様ら！」

俺らが振り向くと市長がいた。

「この屋敷に一步も入れるなど言っただろ」「お言葉ですが市長」

拓哉が市長の言葉を遮る。

「今回の突然の依頼変更を言ってきたのはどこのどいつだかご存知ですか？」

「そ、それは……」

「ん？何ですかチキン野郎」

「ぐ……」

「そう言えば、市長ってそっちの人だったんですね？これをネットにさらせば一体どうなるんでしょうかね……」

「……頼むからそれだけは止めてくれ！今回の件は無かったことにするから！」

「まったく……自分の立場をわきまえてほしいですね」

「「「.....」」」

「ん？どうした？さっさと帰ろっか」

俺らは拓哉に逆らうのはやめようと密かに誓った。

こうして、長い一日が終わった。

第4話 〱市長邸防衛戦〱（後書き）

作「第4話、いかがでしたか？」

蓮「暴れ足りねーな」

作「いや十分だろ」

蓮「結局突っ込みはあるじゃねーか！」

作「それでは皆さんまた5話で会いましょう！」

蓮「突っ込まんぞ」

作「あ、ヒドイ！」

第5話 くごめんなさい脇役

どーも、蓮だ。俺は今、学校にいる。今日は年に一度の身体検査の日らしい。

「今日は身体検査の終わった人から帰っていいわよ」

担任の由希がクラスの奴らに向かって言う。

「さっさと終わらせてどっか遊びいこうぜ！」

温哉が言う。

「じゃあ早く行こうぜ」

俺はそうやっていつものメンバーと、体育館に向かった。

体育館では、身長・体重・座高・視力・握力を計る。

俺の身長は175センチで、体重は58キロ、座高は86センチだった。何かアリスたち女子組は体重を見て落ち込んでいた。

「また身長で蓮に負けた…」

隣で温哉がうなだれているがどうでもいい。さっさと次に行く。

視力はいつも通り問題なし。

「次は握力が…」

「蓮の得意分野だね」

「お前もだろ」

俺と拓哉は武術をやってるため、ある程度体は強い。

「じゃあ僕から……………まあまあかな……………」

拓哉の握力は左右共に56キロだった。

「次は俺か……………こんなもんか」

「……………」

何だよ。何咄然としてんだよ。

「蓮……………すごすぎだよ」

アリスが言う。俺の握力は右が68キロ、左が65キロだった。

「そうか？こんなもんだろ」

他の奴らの視線を背に受けて、俺は校庭へと向かった。

校庭では50メートル走、1500メートル走、反復横跳びを計測する。

「よっしゃ拓哉、勝負しようぜ！」

「いいね、手加減はなしだよ」

そう言つて俺と拓哉はスタートラインに並ぶ。

「よーい」

パアアアン！！

スタートの合図と共に俺と拓哉は飛び出す。隣を見てる余裕はない。全速力で走りきる。

「……斎藤が5秒6！浅川が5秒7！」

「俺の先勝だな」

「……まだ次があるよ」

まずは俺の勝ち。……って言うか何だ毎回。お前らは俺を人外を見るような目でみるな。

「蓮……………貴方ホントに人間ですか？」

「どういう意味だよ！」

「あんた化け物じゃないの？」

「言いたい放題言うな！」

「蓮、順番だよ」

「……………あああああ！煮え切らない！なんかイライラする！」

その後、1500メートル走で拓哉に惨敗した……………

「アンタは結局その程度なのね」

「どっちなんだよ！俺は人外なのか？凡人なのか？」

「ちよつとうつさいわよ！耳元で大声出さないで！」

「突っ込み否定ですか！？ボケだけじゃ成り立たねーぞ！」

「大丈夫よ、拓哉が代わりにやってくれるわよ」

「ここでまさかの僕に無茶ぶりですか…」

そんなこんなで身体検査は終わった……………

「よし、遊ぶか！」

「ちょっと待て温哉。とりあえず飯にしようぜ」

「そうだな、そういえば昼飯食ってなかったな」

「どんだけ楽しみにしてたんだよ」

「だってお前！こんなたくさんの女の子と遊ぶなんてお前！そんな素敵イベント滅多にな「ドオオオオオン！！」ゲフウ！！」

とりあえず腹に膝打ち。やっぱなんか温哉と話してるとムカつくな。まあほかの奴らが笑ってるしいいか。

「ファミレスでいいか？」

「いいよ」

アリスが答える。

「じゃあ行くか」

俺たちはファミレスへと向かった。

「いらっしやいませー！何名様で……す………か……？」

なぜか店員の顔がひきつっている。ああ、こいつのせいか。

「あー、お騒がせしてすいません。六人でお願いします」

「え？七人じゃ……」

「あ、六人と一つで」

「かしこまりましたー。席が離れてしまいましたがよろしいでしょうか？」

「別にいいです」

席は俺、アリス、明日香の組と拓哉、莉子、ローラ、温哉の組に別れた。

「そういえばもうすぐ体育祭ですわね」

突然明日香が言い出した。

「あー、もうそんな時期か」

俺らの学校の体育祭は5月に行われる。競技もそこら辺の学校とは違い、生徒がやりたい競技をアンケートをとって、その中生徒会が決めるらしい。

「体育祭ってどんなことやるの？」

「俺らも今年が初参加だけど、去年は確か、借り物競争から始まって騎馬戦やら障害物競争やらたくさんあったらしいぞ。しかもその内容も悲惨だったらしい。そのせいで外部の人がたくさん見に来るって聞いている」

「なんか楽しそうだね」

「今年は我が田島家が全面協力しますわ。なので、去年とは比べ物にならない派手さになるでしょうね」

へー。まあ派手になるならいいか。

「お待たせ致しました。カレーでございます」

ちよつど話がきれた時に店員がやって来た。何やらニヤニヤしているが気にせずに食べる。……ん？何か変じゃね？これ……

「つてかれー……！！いやシャレじゃないから！何これマジで辛い！」

涙目で店員を見ると、爆笑して帰っていった。いやアンタ何してんだよ！

「アリスに明日香。お前ら何かしたか？」

二人とも目に涙を浮かべながら首を横に振る。

「あの店員の独断かよオオオオ！」

「すいません。他のお客様のご迷惑となるので店内ではお静かにお願いします」

「………すいませんでした」

「じゃあどこに行こうか……………って蓮？どうした？死人の
ような目をして」

「拓哉……聞かないでくれ」

俺は完全に元気をなくした。口の中がまだピリピリする…

「とりあえずカラオケ行こうぜ！」

この温哉の提案でカラオケに行くことになった。

『ジャンケーンポン！！』

じゃんけんの結果、莉子、明日香、温哉、俺、アリス、ローラ、

拓哉の順番で回すことになった。

「まずはあたしからだね！」

そう言つて莉子が歌う。……普通にうまい。

「次は私ですわね」

次に明日香が歌う。……演歌？何故に演歌？いやうまいけど！うまいけれども！ほらみんな作り笑いしてんじゃねーか！お嬢様はみんな演歌を歌うのか！？

「……次は俺だな！」

なんか無かったことになって温哉が歌う。……ちょっと待て！これは酷い！酷すぎる！お前この曲のどこも音程合つてねーよ！ジャイオンよりも酷い！

『……………』

みんな絶句じゃねーか！これユー○ユーブにあつたら叩かれまくりだろ！この曲のアーティストに謝れ！

「……………完璧！蓮！この俺を越えられるか！」

こいつ……………いやもういいや。少なくともこいつにだけは負ける気がしない。とりあえず、曲を入れて歌う。歌ってる最中は他の人を見なかったため反応は分からない。歌い終わった後、みんなの方を見る。……………あれ？何絶句してんの？まさか温哉と同レベル

なのか？

「うますぎだよ！蓮！ハードル上げないでよ！」

「そうか？俺的には温哉と同レベルじゃなくてよかった」

「もう……………どうしよう」

そう言ってアリスが歌う。……………俺たちはまた絶句。

「……………どうだった？」

アリスが恥ずかしそうに俺たちに聞く。

「いや……………普通にうまい」

「そう？よかった〜！」

結局その後俺とアリスが交互に歌い、時には二人で歌わされた。正直しんどい以外の何でもなかった。何でアリスは楽しそうなんだよ！つか俺らだけ歌ってていいのかお前ら。ローラと拓哉は一回も歌ってないじゃねーか！

「どーせ僕らは脇役だし……」

「私なんて最近ほとんど出番無いし……」

おい作者！もっとみんなを出せ！

今日も俺らは平和だった
.....

第5話　　くごめんなさい脇役く（後書き）

作「はい！第5話どうでしたか？」

蓮「初めて突っ込みを否定されたぞ」

作「ドンマイ。突っ込みはそういうことも考慮していかないかね」

蓮「個人的に後一人くらい突っ込みがほしいな」

作「個人的にはキャラが増えすぎると空気キャラが増えるから無理かな」

蓮「お前はホントに個人的だな！だいたい今回の話でももう回せてなかっただろ！」

作「お、素晴らしい突っ込み！よっ！突っ込み王！

蓮「嬉しくねーよ！」

作「それではまた第6話で会いましょう！」

蓮「ハア……………」

第6話 料理の難しさ（前書き）

短くてすみませんorz

第6話 料理の難しさ

蓮だ。すべての始まりは家でのローラの一言だった。

「私も料理を作ってみたいんだけど」

今考えればこれは何かが起こるフラグだったに違いない。だが俺はこれからの俺とアリスの負担を考えて、ローラにも料理が作れればどれだけ楽になるかと思い、あっさりOKしてしまった。

「じゃあ簡単なチャーハンとかからやってみるか？」

「出来れば私一人でやりたいから蓮は横から口出ししてくれるだけでいいわ」

「お前初めてだろ？レシピは？」

「グ○ったから大丈夫よ」

「そうか。食材は…あるな。じゃあ見ててやるから作ってみろ」

俺がそう言うと同時にローラは肉を小さく切り始めた。切り終わったらネギとニラを細かくきざみ始めた。

「何だよ。慣れてんのか？」

「……………」

「おい聞いてんの「ちょっと話しかけないで！」……悪い」

……だいぶテンパってるな。ちょっと心配になってきた。

「アリスー！ちょっと来てくれー！」

「どうしたの？蓮」

「何か俺だけじゃ心配だからお前もローラのこと見てくれ」

「わかったよ」

これで万全だな。たぶんほとんどの事に対応できるはずだ。
そんなうちにローラはネギとニラを切り終えて、肉を炒めようとしていた。

………なんか油多くね？

「油は少なくていいんだよ」

ナイスだアリス！

「え？焦げちゃうじゃない！たくさん入れても大丈夫よ！」

そう言っつてローラは油を大量に入れていく。

「おい！入れすぎだろ！油が水溜まりみたいになってるぞ！」

「問題ないわよ！黙って見てなさい！」

何でお前が上の立場なんだよ！と突っ込む前にローラは肉を投入…

……

「投げ入れてんじゃねえよアツツ!!」

肉を投げ入れたせいで溜まっていた油がはねた。

「おいアリス!この金髪バカをどうにかしてくれ!」

「無理だよ蓮!もうローラは誰にも止められない!アツツ!」

油がバチバチはねる。

「大丈夫かアリス!……………クソツ!おいローラ!もう暴走はやめろ!」

「アハハハハハ!たのしーーーー!!」

「ダメだコイツ……………早く何とかしないと…」

つづいてローラがニラとネギを投げ入れる。フライパンの中にはほとんど入らず、周囲にぶちまけられる。

「もうやめてくれ!これ以上キッチンを荒らさないでくれよ!!」

「何言ってるのよ!お楽しみはこれからよ!」

「確か今は料理中だよね!?お楽しみって何なのさ!」

遂にアリスまで突っ込みに回る。

「もうダメなのよ!もう誰にも私を止めることなんて出来ない!」

そう言つてアリスは炊飯器からご飯をとりだそうとして……固まった。何だ？何が起こつたんだ？

「ご飯が…無い……だと……？」

こゝこれはチャンスだ！だがキッチンには油がはねまくつて俺らは中に入れない！

「こつなつたら魔術で！」

「ダメだ！魔術なんて使つたらキッチンが使えなくなつちまう！ここが使えなくなつたら俺らに残された道は餓死しかない！」

「そんな……じゃあどうすればいいの？」

その時、ローラが動き出した。ん？手になんか持っているぞ？……あれは………米、だと？

「あるじゃないのお米が！これを入れて……」

「や、やめろ！そいつは炊けてもないし、それ以前にといでもない！そいつはまだ食えないぞ！」

「米は米でしょ！それ！」

「ギヤアアアアア！」

ローラが米を投げ入れる。バラバラに散らばる。……いやフライパンの中でなんか米がバチバチ音が鳴ってるんですすけど！？

「もう十分だろ！満足したんならすぐに火を止める！」

「無理よ！近寄ったら油で火傷しちゃうでしょ！」

「全部お前のせいじゃねーか！……っておい！なんか煙が出てるぞ！」

「お肉が焦げてるんだよ！早く火をとめて、ローラ！」

「イヤだ……私はまだ死にたくない……」

「仕方無い……おい、よく聞けローラ！このままだとみんな死んじまう！だが、お前が火を止めれば助かる命が増えるんだ！だから頼むローラ！火を止めるんだ！」

「火を止めてこの家を救った英雄になるんだよローラ！」

「蓮……アリス……わかったわ。私が！ローラ・ディアスが！この火を止める！止めて、この家を救う！」

そう言つてローラは超高温の油の雨の中に突っ込んだ。そして、ローラは手を伸ばし、コンロのスイッチを、切った。

火を止めた後、ローラはその場に倒れた。

「「ローラ!」」

俺らはローラの元へ駆け寄る。

「おい!しっかりしろ!ローラ!」

「蓮……………あのね……………」

「何だ?ローラ……………」

「私が死んだらさ……………」

「何いつてるのさローラ!」

「いいの……………蓮、頼まれてくれる?」

「何だ?言ってみろ……………」

「私の部屋にあるDVD、シ〇ヤに返してって」

「……………ふざけんなアアアア！誰のためにこんな茶番に付き合
ったと思つてやがる！最後までらい感動の場面にしろよ！見ろ！この
悲惨なキッチンを！一体誰のせいであんなことになつた！誰の暴走
であんなことになつたと思つてやがる！全部テメエのせい……………」
………　　つて寝てんじゃネエエエエエエエエエエ！！！！！」

「……蓮、もうローラはキッチンに二度と入れないようにしよう」

「……そうだな」

ちなみに、ローラが作ったチャーハン我真つ黒に焦げてダークマターと化していたため、無かったことにして処分されたという……………

第6話　　料理の難しさ（後書き）

作「はい！というわけで第6話でした！」

蓮「お前、暴走したな」

作「そうだね、今回は結構ヤバイね」

アリス（以下『ア』）「結局キッチンはローラが掃除してたよね」

蓮「まあ当たり前だけどな」

作「二人ともお疲れさまです」蓮「今度温哉の家でローラの手料理作らせようぜ」

ア「あ、それいい案だね」

作「二人とも黒いよ！？………それでは今回はこの辺で。また第7話でお会いしましょう！」蓮ア「フフフフ………」

作「二人とも落ち着いて！！」

第7話 〱家族〱（前書き）

なんだこれ……

自分で書いていて恥ずかしくなった……

第7話 家族

蓮だ。今日は日曜だから学校はない。俺とアリスとローラは家で煎餅を食べながら、笑ってい〇とも増刊号を見ている。そんな時、俺はふとあることを思い出した。

「お前らいつまでこっちの世界にいんの？」

「.....え？」

「.....いや、え？じゃなくて」

「だって帰る方法がないし」

「先生に連絡はつかないのか？」

「……………あ」

「何？お前ら帰るつもりなの？」

「あの時はお腹が空いてそれどころじゃなかったからね」

「何か帰るのもめんどくさくなったのもあるわね」

「突っ込みどころがありすぎてどこから手をつければいいのか分からん……」

アリスは携帯を取りだし、どこかにかけ始めた。つーか世界が違うのに携帯なんか繋がるのか？

「あ、もしかして先生ですか？」

「繋がるんかい！」

「ちょっと！電話中は静かにしなさいよ！」

ローラに怒られた。その携帯はどんな仕組みしてんだよ……

「私たちっていつ帰れるんですか？……え？はい…分かりました。……蓮、先生がお話したいって」

「はあ？何で俺が………はい、もしもし」

「あ、君がアリスとローラの面倒見てくれてる人？」

電話から聞こえてきたのは若い女性の声だった。

「そうですけど、貴女は？」

「あら、ごめんなさい。私はレイチェル・ウィンター。レイチェルでいいわ」

「んじゃレイチェルさん。俺になんか用ですか？」

「あー、その事なんだけどさ」

何か嫌な予感がある。

「別に今戻そうとすれば戻せるんだけど、私がそっちに行かなきゃなんないんだよね。それもめんどくさいし、その子達の人生経験としていい機会だからしばらく預かっというて」

………はい？

「いやいや！何その適当さ！？仮にもアンタの生徒だろ！それなのに放置つて！いくらなんでもメチャクチャだろ！というよりアンタの超個人的理由だろ！」

「年上には敬語を使いなさい！そんな子に育てた覚えはありませんよ！ちなみに私は21よ！」

「誰も聞いてねーよ！教え子が教え子なら先生も先生だな！つか若いなオイ！」

「まあそれはおいといて」

「おいとかれたよ！？」

「まあそつちを知るためには1年くらい必要よね」

「だが断る」

「これから一年間、アリス・キャロル並びにローラ・ディアス両生徒をそちらの世界に留学生として送り込みまーす！」

「ねえさっきの聞いてた！？さらっと人の発言スルーすんのやめよ

う！？大体それって本人達に向かって言う言葉なのに何で俺に向かつて言ってるのさ！？」

「来年の3月にまた連絡するから。それまでよろしく頼むわよ」

「すいませーん誰かこの電話の相手を病院に連れてってくださいーい！精神科と耳鼻科でお願いしまーす！」

「なんかあなたとは仲良くなれそうだね。私の発言の一言一言にここまで突っ込んだのはあなたが初めてよ」

「俺もですよレイチエルさん。俺をここまで突っ込ませた人は久しぶりですよ」

俺とレイチエルさんの間に、謎の絆が生まれた。まだ一回も会っていないけど。

「じゃあ二人をヨロシクね！バイバーイ」

そう言つとレイチエルさんは電話を切った。つ、疲れた……

「何か大変そうだったね……先生は何だった？」

「『うちの生徒二人を一年間預かっというて、また一年後に連絡するわ！じゃー！』だと」

「なんだ、大したことないわね」

「そうだね、結局何も変わらないって事だよな」

「いやお前ら、もうちょっと焦れ」

「もう慣れちゃったのよ」

「うんうん」

こいつら一体どんな生活送ってたんだよ……と心の中で突っ込む。
何で声に出さないかって？ 疲れたからだよ。

「親は？ 心配しないのか？」

「親は先生よ」

「……………はい？」

「私たちの産みの親は私たちを置いて蒸発したの。それを拾ってくれたのがレイチェル先生なんだよ」

アリスは心なしか、泣きそうな顔をしていた。

「そうか……………何か悪いな、嫌なこと思い出させちまって」

「いいよ、別に。それより蓮のお母さんとお父さんはいないの？」

「なんだ、会いたいのか？」

「い、いやそういう意味じゃなくって、蓮は一人暮らしみたいだから親は何してるのかな」と思って」

「死んだよ」

「「えっ……………」」

「俺の母親は父親からDVを受けてた。父親は気に入くわなかったことがあるとすぐに母親に手を出した。そんな日が毎日続いて、母親は死んだ。自殺だった。その後父親は俺を置いて出た。その頃俺はまだ七歳だったが、それからずっと一人暮らしだ。俺が剣術を極めようと思ったのも、もう誰も失いたくないから。大切な人を守るためなんだよ」

「……………」

「え？ちよ、アリスにローラ！何でお前ら泣いてんだよ！」

「だって……………そんな辛い過去があつたなんて……………」

「そうよ……………何で黙ってるのよ！」

「それを言うならお前らもだろ？これでおあいこだ。だから泣くのをやめろ」

「私たちは……………育ててくれる人がいたのに……………蓮とは比べられないよ……………」

「親がないのは一緒だろ？………わかった、もう泣け。泣いてスッキリしろ。それでこの話は終わりだ」

「「う……うわああああ！！」」

アリスとローラは俺に泣きついてきた。

「寂しかった……お母さんたちがいなくて………」

「私たちを理解してくれる人がいなかったの……」

「じゃあ俺が家族になってやる。お前らの良いところも悪いところも全部受け止めてやる。だから、もっと俺を頼れ。絶対に見捨てたりしないから」

「「うわああああん！」」

この時、俺は誓った。絶対に、コイツらを守ることを。

第7話 〱家族〱（後書き）

作「ということで第7話でした」

蓮「お前の能力の低さ全開だったな」

作「ホントにごめんなさい！自分でも駄文だと思うくらいなんで…
……」

蓮「お前も大変だな」

作「どうか見捨てないで下さい。それでは失礼します」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6674p/>

居候と不幸な少年

2010年12月31日07時22分発行